

A・MUSEUM

vol.85
[2015.12.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



1996.11.6撮影の菅生沼



2015.11.6 撮影の菅生沼



2015.9.11 撮影の菅生沼

菅生沼

当館は、2014年11月に開館20周年を迎え、今年で21歳となりました。開館時に比べると博物館野外の樹木は成長し、隣接する菅生沼の自然環境も大きく変貌しています。本館の屋上から菅生沼を望むと、ふれあい橋周辺では2000年頃から急速に陸化が進み、水面が狭くなっています。

今年の9月の豪雨では、当館の近隣の地域でも大きな被害が発生しました。被災された多くの方々には心よりお見舞い申し上げます。菅生沼は5mも水位が高くなるという記録的な増水となり、沼全体に水面が広がりました。これは菅生沼が遊水地としての機能を発揮した景色でもあります。

ところで、茨城県で2018年に世界湖沼会議が開催されることになりました。これは、1995年に続いて本県2回目の開催となります。会議では、菅生沼の自然環境に関する情報を世界に向けて発信したいと考えています。 (企画課 小幡和男)

第65回
企画展

洞くつ探検 ～地下に広がるふしぎな世界～

Cave Exploration – A Magical Journey Beneath the Earth

長い年月をかけて自然がつくり出した洞くつは、外界と隔離された未知なる空間であり、人々を魅了する神秘的な世界です。不思議な形の岩、壁や天井の独特な形はどのようにしてつくられたのでしょうか。じつは、洞くつでみられるさまざまな形の鍾乳石は、地下水の一滴一滴がつくり出したものなのです。鍾乳石が1cm伸びるのに数百年かかるといわれています。つまり何千年、何万年の時を経てあのような造形をつくりあげたのです。まさに自然がつくった芸術です。

また、洞くつの生きものといえば、コウモリを思い浮かべますが、ほかにもたくさんの生きものが生息しています。光のない世界で生きものたちは、眼が退化したり、体が白っぽくなったり、触角や脚が長くなるなどしていきました。生きものたちは、暗黒の閉ざされた世界に適応する形に進化しているのです。

本企画展では、まず狭い通路を通り、洞くつを探検している気分を味わってもらいます。次のコーナーでは、さまざまな洞くつの成り立ちや鍾乳石の種類やでき方を紹介します。ここではいろいろな鍾乳石をみる事ができます。「洞くつの生きものたち」では、コウモリをはじめ、洞くつの生きものたちのおもしろい

生態を紹介します。眼が退化した魚ブラインドケープ・カラシンや小さな生きものの生体、白くてやわらかい謎の物質ムーンミルクを展示する予定です。

「洞くつの探検と調査」では、探検に使う道具を紹介したり、実際に探検に使うロープの結び方を体験したりできます。そのほかにも、洞くつでみつかると化石や洞くつと人間のかかわりについて紹介します。

普段なかなか会えることのない「洞くつ」という地下に広がるふしぎな世界を、この企画展で味わってみたいかがでしょうか。
(資料課 諸橋靖子)

展示構成

- 1：洞くつって何？
- 2：洞くつの生きものたち
- 3：洞くつの探検と調査
- 4：洞くつで見つかる化石
- 5：洞くつと人間
- 6：いろいろな洞くつ



幕状鍾乳石（カーテン）



燐光が美しいフジマシラグモ
撮影：小松 貴



眼が退化したアシナガチビゴミシ
撮影：曾根信三郎



ブラインドケープ・カラシン



日本で最初に発見された洞くつ(地下水)生物
カントウイダズムシ 撮影：茅根重夫

会 期 **2016年 2月20日(土)**
～**2016年 6月12日(日)**

2月20日(土)は午後1時からの公開となります。

開館時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)

休 館 日 毎週月曜日

※3月21日(月)は開館し、翌日22日(火)が休館となります。

●自然講座 石灰岩から化石を見つけよう！

日 時：2016年 3月5日(土) 13:30～15:00

場 所：博物館内

対 象：小学生以上 (小学生は保護者同伴)

定 員：30名 (受付は終了しました)

参加費：無料

●自然講座 洞くつの生き物たち(仮称)

日 時：2016年 5月28日(土) 13:00～14:30

講 師：曾根信三郎氏 (日本洞窟学会)

場 所：博物館内

対 象：小学生以上 (小学生は保護者同伴)

定 員：50名(事前申込み・先着順)

参加費：無料

●自然観察会 あぶくま洞・入水鍾乳洞を探検しよう！

日 時：2016年 6月5日(日) 9:00～15:00

場 所：あぶくま洞(現地集合)、入水鍾乳洞

対 象：小学生以上 (小学生は保護者同伴)

定 員：30名 (事前申込み・抽選)

参加費：別途、あぶくま洞、入水鍾乳洞の入場料が必要です。

中期計画2015シリーズの第3回は、広報活動の取り組みについて紹介します。本計画の三本柱には、第1回で紹介した「地域に根ざした博物館」とともに、「最新のICT化に対応した博物館」と「おもてなしの心で夢を提供する博物館」という目標を掲げています。

まず、ICT化対応です。博物館活動では、資料のデータベース化推進、展示解説へのICT導入などが目標となりますが、なんとといっても情報化社会に対応した効果的な広報活動が重要な時代となっています。当館では開館3年目の1997年10月1日にインターネットホームページを開設しました。その年間アクセス件数は開設当時の1998年度が20,573件、開館10周年の2004年度が132,180件、開館20周年を迎えた昨年の2014年度が361,875件となっており、インターネット利用者が急激に増加している状況がうかがえます。また、当館で開館以来実施している来館者へのアンケート調査で、はじめて来館する人が当館を知った情報源は、2004年度は①口コミ(39%)、②ポスター(16%)、③新聞・雑誌(13%)、④インターネット(9%)でしたが、昨年度の集計では①口コミ(26%)、②インターネット(20%)、③ポスター(13%)となっており、インターネットによる広報の重要性がいかに高くなっているかがうかがえます。

当館では、みやすく使いやすいホームページを目指して、2014年3月にリニューアルしました。そのおもな改善点は、新着情報へのイベント情報の即時掲載、フェイスブックによるフレキシブルな広報などです。また、イベント申込、各種刊行物PDFのダウンロード、標本資料の検索なども利用しやすくなりました。

次に、おもてなしの心です。当館で広報を担当する私たちは、ICT化など最新の技術ばかりに頼っているわけではありません。県内外で開催されるイベント会場や大型商業施設にとっておきの資料を持って出かけ

る「ミニ移動博物館」は、重要な広報活動です。また、9月のシルバーウィークには、敬老の日になんで「3世代で博物館」プレゼントキャンペーンを実施し、394組のお客様にプレゼントを贈呈しました。これからも皆さんに喜んでいただける楽しい広報活動を展開していきたいと思っております。(企画課 小幡和男)



ホームページのトップページ

干支の申(猿)

来年の干支は申年で動物ではサルがあたります。

日本に生息する霊長類はヒトと二ホンザルのみで両者は最も近い縁戚関係にあります。

このため古来より狩猟の対象とはせず神の使いとして崇められたり、サルというよび名から「魔が去る」「勝る」ということで、サルの人形や毛が災害よけのお守りとされており、サルと人の長い歴史から「猿蟹合戦」「桃太郎」などの昔話

や、童謡の「お猿のかごや」、絵画では「野猿図」、植物の「猿麻袴」など幅広い分野にわたり深いかわりを持っています。

二ホンザルは鹿児島から青森まで広く分布し、関東でも千葉、埼玉、群馬、東京に生息していますが、不思議なことに我が茨城県にはおりません。しかし、猿島台地、猿島郡、猿島村(旧称)の名称やサルにかわりの深い山王神社も各地にあり、その由来には、地形説・人名説など

館長コラム by director SUGAYA

があるようです。

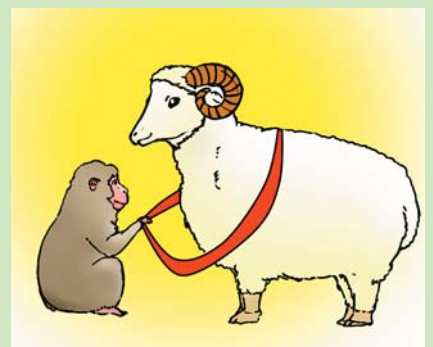


イラスト:池上侑花(ミュージアムコンパニオン)

極東ロシアにおける野生クマ類調査

研究報告 1

2015年10月、野生のクマ類調査のためロシアのシホテ・アリン自然保護区を訪れました。ここでは、世界自然遺産に指定されている地域であり、黒澤明監督が映画化したロシア人探検家の紀行文「デルス・ウザーラ」の舞台であることでも知られています。ロシアというと、どこか遠い国のイメージがあるかもしれませんが、調査地に最寄りの沿海州の都市テルネイは北海道とほぼ同じ緯度で、稚内から日本海をはさんでわずか400kmの距離にあります。

この地に生息する動物には日本と共通種も多く、シマフクロウやシマリス、ユキウサギなど北海道にみられる種や、ニホンジカやイノシシ、タヌキやキツネといった日本でもなじみの深い動物が生息しています。加えてアカシカやムースといった大型のシカ類や、日本では既に絶滅してしまったオオカミやカワウソが生息するなど、人間の影響の少ない原生的な自然が残されています。また、クマ類に関しては、日本では北海道にヒグマ、本州・四国にツキノワグマとわかれて生息する2種が、同所的に生息するという世界的にもまれな地域です。さらに、ここにはトラのなかでも大型亜種のアムールトラが生息しており、ときにクマがトラの餌になるというスケールの大きな生態系が広がっ

ています。これらの種がお互いにどのような影響を与えながら生息しているのが、その解明に取り組むのが本調査の目的のひとつです。

森にすむ多くの動物たちの餌資源となっているのが、チョウセンゴヨウという巨大な球果（マツボックリ）をつける松の実です。人が食べてもおいしく、サラダのトッピングやおつまみなどに利用されています。日本では本州中部の山岳地域にまれに生育しますが、ロシア極東地域では広大な森を形成しています。結実量は年により変動がありますが、今年是不作の年でした。クマたちはこのような秋は何を食べているのでしょうか。痕跡を探していると、森の中に点在する地面に深く掘られた穴にその答えの一端がみつかりました。リスのなかまは地中の巣穴に食べ物を貯食する性質があるのですが、その大きな穴はリスが貯めた松の実をクマが掘り起こして食べた跡だったのです。地中にある松の実をみつけるクマの嗅覚に感心しますが、小さなリスがせっせと貯めた松の実を大きなクマが横取りするなんて、どこか童話に出てきそうな話です。

今後、調査が進むにつれて、さまざまな生物が相互に関係をもちながら成立している森の神秘が解明されることが期待されます。（教育課 後藤優介）



リスによるチョウセンゴヨウ球果の食べあと 種子の殻を割り中身を食べる



リスが地中に貯食した松の実をクマが掘り起こした跡

碧い蝶

皆さんはモルフォチョウという碧く美しい翅をもつチョウを知っていますか。

モルフォチョウは中央アメリカから南アメリカにかけて生息する大型のチョウです。モルフォとはギリシャ語で「美しい」を意味し、ミイロタテハ、トリバナアゲハとともに世界三大美蝶といわれています。

翅に金属光沢があるのが特徴です。これは鱗粉そのものが光っているのではなく、構造色という現象によっ

て光っています。構造色とは微細な構造によって光が干渉して色づいてみえていることをいい、シャボン玉やCD、孔雀の羽にも構造色がみられます。また輝くような碧い翅をもつのは雄のモルフォチョウで雌はあまり綺麗な翅をもっていません。そして雌雄ともに翅の裏側は地味な茶色をしています。

当館の第4展示室ではモルフォチョウをはじめとする美しいチョウはもちろん、たくさんの昆虫の標本

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

を展示しています。博物館にお越しの際にはぜひご覧ください。

(ミュージアムコンパニオン 佐藤里奈)



メラネウスモルフォ

ヨロイグサ

研究報告 2

桜川は、桜川市を源に、筑西市からつくば市を流れ、土浦市で霞ヶ浦に流入する総延長54kmの河川です。桜川では、茨城県や環境省が指定する20種を超える絶滅危惧植物の生育が確認されており、特に下流域には、トネハナヤスリ、ハナムグラ、ゴマノハグサなどの河川敷の湿地環境に生育する希少種がみつかります。この桜川で、茨城県初記録の植物ヨロイグサの生育を確認したので報告します。

ヨロイグサは、草丈2~3mになるセリ科の大型植物で、鎮痛剤として漢方の生薬となり、しばしば栽培されることもあります。発芽から開花結実までに数年を要しますが、花実をつけるとその年に枯れてしまいます。日本では、九州地方と中国地方がおもな分布域となっています。また、朝鮮半島、中国東北部、シベリアにも分布します。兵庫県、大阪府、東京都、栃木県、宮城県でも標本の記録がありますが、栽培品の可能性があり、東方向にどこまで分布しているのかははっきりしません。また、愛媛県産標本の再検討により、四国初記録のヨロイグサがあることがわかりました。

桜川でヨロイグサを最初に発見したのは、県内の植物の分布を精力的に研究している栗原孝さんで、2010年6月に土浦市飯田の桜川河川敷で調査をしてい

るときでした。このとき採集した標本をいっしょに検討したのですが、よく似たシシウドとの区別がつかず、花実がついてから再度検討しようということになりました。シシウドは、茨城県内では山地の明るいところに比較的普通にみられます。低地の河川敷にシシウドが生育することはめったにないので、桜川で確認したシシウドに似た植物はヨロイグサの可能性があると考えました。

栗原さんは、その後2012年まで、花実のついた標本を採集したり、分布状況を確認したり、再調査を重ねました。その結果、葉の大きさ、鋸歯の形、花茎の太さ、開花の時期、果実の構造など、ヨロイグサの特徴を確認することができました。また、分布も広範囲で桜川の両岸数kmにわたって、かなりの個体数が生育していることがわかりました。

さらに、2013年に横浜薬科大学の寺林進教授、2014年に人間環境大学の藤井伸二准教授に標本をみていただく機会を得て、桜川のこの植物がヨロイグサであることが確定的となりました。その後、2015年まで博物館と合同で詳細な分布調査を実施しました。今後、これらの研究成果をまとめて発表したいと考えています。(企画課 小幡和男)



ヨロイグサの花

(撮影:栗原 孝)



ヨロイグサの果実

(撮影:栗原 孝)

とにかく動かないウツセミカジカ

ウツセミカジカは魚というよりは爬虫類のような顔をしています。普段は第3展示室の水槽の底でとにかく動かないので、そこもまた魚らしくありません。よくお客様から「生きているの?」と心配されてしまいますが、あまり動かないのには鰓の有無が関係しています。

多くの魚は鰓という器官で浮力を調整し水の中を自由に泳ぎますが、この魚には鰓がありません。そのため浮くことができず、普段は底で

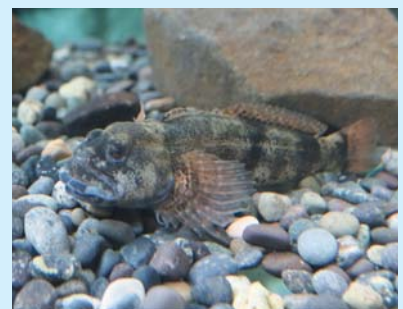
じっとしていることが多いのです。

しかし、活動的な一面もあります。餌のアジを与えると大きな胸鰭を力強く動かし、餌を捕らえます。頭部には振動を察知する感覚器官が発達しているため、獲物や餌への反応が速いです。

鰓という魚特有の器官はないものの、厳しい自然界を戦い抜く闘志は体の中に秘めているのでしょうか。人も魚もみかけによりません。心配してくださった皆様、ご安心ください。

おさかな通信

ウツセミカジカはたくましく生きてますよ。(水系担当 藪内雅英)



ウツセミカジカ

新種のハチ

収蔵品紹介

今年になって、身近でよくみられるハチに、新たな報告がありましたので、それを2つ紹介しましょう。

ムモンホソアシナガバチは、ほかのアシナガバチより色白なハチです。県内にも広く分布し、林の中や縁の低木や草本の葉の裏に、よく巣をつくります。

よくみることができるムモンホソアシナガバチですが、これまで中国からベトナムに広く分布する *Parapolybia indica* という種と考えられていました。最近になって茨城大学の諸岡歩希准教授らのグループは、日本のムモンホソアシナガバチが *P. indica* とは異なる形質があることを発見しました。*P. indica* と長年思われていた本種ですが、それとは別種の新種のハチであることがわかったのです。諸岡先生はこのハチに *Parapolybia crocea* という新しい学名をつけました。

当館では、学名をつける際に参考にした標本のひとつであるオスのパラタイプ標本を寄贈いただきました。



新しい学名がつけられたムモンホソアシナガバチのオス(左)とメス(右)

また、当館の自然発見工房の軒下に、竹筒を束ねたトラップを仕掛けてあります。そこにも営巣する種で、県内では普通にみられるオオフタオビドロバチというハチがいます。借坑性（既存の坑を利用して巣をつくる）の大型のハチで、日本でこの類の新たな発見はないと思われていました。

しかし、オオフタオビドロバチに紛れて、だれもその存在に気づかなかった新種のハチが発見されました。それが、今回新種として報告されたオデコフタオビドロバチ *Anterhynchium gibbifrons* です。頭頂部が突出していることで、この名前がつけられました。こんな大型のハチの新種がまだみつかるのは驚きです。

この標本は、発見者の室田忠男氏より寄贈いただきました。現在、このハチが記録されているのは福井県のみです。調査が進めば、ほかの地域でも記録されるかもしれません。（資料課 久松正樹）



オデコフタオビドロバチのメス

ヒカリゴケ

なるほど博物館

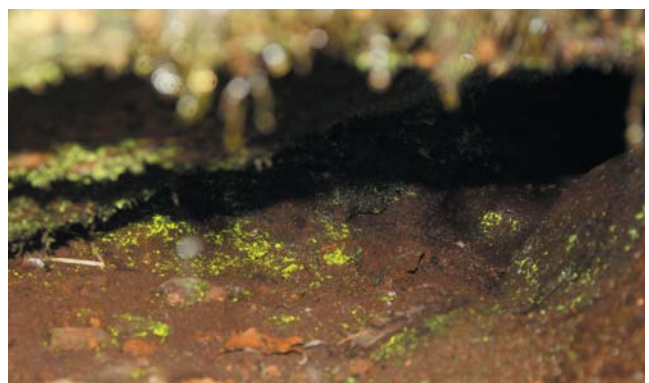
このコーナーは、自然に関するさまざまな情報を、わかりやすくお伝えするコーナーです。

コケのなかで知名度が高いもののひとつにヒカリゴケがあります。洞くつの入り口や岩陰に生育し、日本では、埼玉県の吉見百穴、東京都の皇居、長野県の岩村田などでみられ、天然記念物に指定されている場所も多くあります。ヒカリゴケはホタルなどとは異なり、自ら光を放たず、反射だけで光って見えます。ヒカリゴケの細胞を顕微鏡でみると綺麗な丸い形をしていて、葉緑体が中心に集まっています。これがレンズのはたらきをしていて、弱い光を集めて反射板のようにキラキラと輝くのです。これは、薄暗い場所で効率的に光を集めるためのしくみではないかと考えられています。

ヒカリゴケの光っている細胞は、「原系体」とよばれる部分です。原系体はコケの赤ちゃんのようなもので、胞子から発芽してすぐにできる、藻類のような体です。この一部からコケの大人の体である茎と葉ができるのですが、ヒカリゴケの茎と葉はまったく光りません。大人になると輝きを失ってしまうとは、何とも切ない気分になります。なお、普通のコケは茎と葉ができると原系体は消えてしまうのですが、ヒカリゴケ

は原系体がずっと残り、生き続けることができます。

現在、博物館ではヒカリゴケの栽培に挑戦しています。すずしく湿った環境を好むため、バックヤードの冷蔵庫で約10℃、湿度約100%に保って栽培しています。長野県の飯田市美術博物館で展示されていた株を譲っていただいてから約2か月が経ちましたが、生育はたいへん良好です。企画展「洞くつ探検」で公開予定ですのでご期待ください。（資料課 鷓沢美穂子）



日立市御岩山に生育するヒカリゴケ

トピックス

○シルバーウィーク「3世代で博物館」プレゼントキャンペーン

2009年から6年ぶりに訪れた5連休のシルバーウィークでしたが、いかがお過ごしだったでしょうか。

当館では、2015年9月19日(土)～23日(水)のシルバーウィーク期間が、敬老の日を中日とすることから「3世代」で来館されたご家族を対象に記念品をプレゼントさせていただきました。

はじめてのイベントでしたが、期間中は当初の予想を大きく上回るご家族が参加してくださり、計394組、2,057名ものご家族にプレゼントをお渡しすることができました。プレゼントを受け取り「なにが入っているんだろうね」「おじいちゃんおばあちゃんと来てよかったね」といった声を聞くことができ、プレゼントを囲み和気あいあいとしたご家族のすがたが印象的でした。

今回の好評を受け、来年以降の敬老の日を含む連休にも同様のイベントを実施する予定です。ご家族にも楽しめ、愛される博物館を目指し、今後もいろいろなイベントを計画いたします。また皆さんで来館ください。(企画課 丹波優市)



3世代で来館されたご家族

○嫌われものの動物たち連続講座

10月31日(土)に、自然講座「嫌われものの動物たち連続講座」を行いました。この講座では、現在開催している企画展「くらしの中の動物」に登場する嫌われものの動物たちを取りあげました。シロアリ、ゴキブリ、ハチ、ネズミ、ヘビについて、それぞれの動物の生き方や自然界で担うはたらきなどを、5名の企画展スタッフが20分ずつ話をしました。生態について詳しく説明するものがある一方、企画展準備のようすを撮影した動画を上映するものがあったり、参加者に生体のタッチングをしてもらったものがあったりと、それぞれの学芸員の個性が光る講座となりました。

参加者からは、「懸命に生きる嫌われものの動物と私たちは、必ずどこかでつながっていると思った」「人間の都合で『害』ととらえられてしまっているが、それぞれの動物が工夫して生きていることがよくわかった」といった、嫌われものの動物たちに対する温

かい感想をいただきました。

今後も、大人から子どもまで、どなたにでも楽しみながら学んでいただけるような講座を開催します。ご期待ください。(教育課 潮田好弘)



アオダイショウの幼蛇をタッチング

○森林・林業体験学習の実施

ー茨城県農林水産部林政課との連携ー

茨城県農林水産部林政課が窓口となり募集している森林・林業体験学習の会場として、今年度より当館が利用されることとなりました。この学習は、林政課から委託された緑化推進機構の職員の案内のもと、参加する各団体が当館野外施設の雑木林で自然観察を行ったり、丸太切りなどの体験学習を行ったりするというものです。

5月に実施された笠間市内の小学校の団体を皮切りに、11月上旬までに全17団体、計955名の方が森林・林業体験学習に参加しました。今後も予約が入っており、今年度で1,000名を超える方が博物館内での森林・林業体験学習に参加される予定です。

参加した子どもたちは、自然観察の後の丸太切り体験で、直径15cmあまりの丸太を一生懸命のこぎりを使って切っていきます。切り取った丸太は、お土産して持ち帰ります。林業体験の楽しい思い出となることでしょう。博物館でのこの体験を思い出に、また博物館に来て野外施設を季節ごとに楽しんでいただくと幸いです。(教育課 小泉直孝)



丸太切り体験のようす

モンゴルの移動住居「ゲル」博物館に現る



ゲルの組み立て風景



完成したゲル

シルバーウィークの自然発見工房前に、突如見慣れない建物が建ちました。その建物は「ゲル」。モンゴルの遊牧民が住んでいる伝統的な住居です。家畜とともに移動しながら生活するために、ゲルは組立式の住居となっていますが、想像以上にしっかりとおり、家を覆う天幕の装飾や室内の色彩やかな調度品をみると、組立式であることを忘れてしまうような存在感です。しかしなぜ、博物館に「ゲル」なのでしょう。

当館は、来年夏に開催予定の企画展「ユーラシアステップの大自然（仮称）」に向けて準備中です。この企画展では、モンゴルを中心としてその周辺に広がる草原地域の人々の生活や文化、草原の動植物などを紹介する予定です。その取材のため9月13日から9月23日までゲルを建てたのです。

ゲルの借用から組み立て・解体まで、中国内モンゴル自治区出身のウリジさんの全面的な協力を得ることができました。運ばれてきたゲルの部品はコンパクトでしたが、組み立てははじめると、意外に大きいことがわか

ります。約3時間後に組み上がったゲルは直径が約6m、高さは約2.7mの立派な建物となりました。10日間の公開の後、ゲルを解体しましたが、解体作業は開始から40分ほどで終了してしまいました。あまりにあっけなく解体されてしまったことに驚くとともに、遊牧生活にたいへん都合のよい家屋であることを改めて実感しました。

来年夏のゲル、そしてモンゴルの大自然にまつわる展示をどうぞご期待ください。（資料課 宮本卓也）

編集後記

今号の表紙にも登場している菅生沼の清掃活動イベント「菅生沼エコアップ大作戦！」を2015年11月21日に実施しました。活動中、沼から引き上げたタイヤの中に絶滅が危ぶまれているニホンウナギがみつかりました。人間の都合で捨てられたゴミが絶滅危惧種のすみかになっているとは、なんと皮肉な話ですね。

今一度、自分の身近なところからでも自然環境のためにできることを考えてみてみませんか。（Y. T）

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
 - 鉄道・バスご利用の場合
 - 東武アーバンパークライン(野田線)愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
 - つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テール、椅子及び TENT 等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。
次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 3月20日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※1月11日(月)、3月21日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※12月28日(月)～1月1日(金)は休館となります。



自然博物館ニュース A・MUSEUM (ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT + MUSEUM)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課 / 発行2015年12月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL <http://www.nat.museum.ibk.ed.jp/>
E-mail webmaster@nat.museum.ibk.ed.jp
9月から当館のHPアドレスが新しくなりました。

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しみ、誰もが楽しめるア・ミュージアム (アミューズメント+ミュージアム) をめざしています。